

## 学習活動と内容

2023. 9. 14

「活動あって内容なし」「活動あって学びなし」とよく言われる。それだけ、学習活動と学習内容には注意を要する。ありがちなのは、活動と内容の区別がつかなくなることである。若い頃だが、活動あって内容なし、学習なしの授業をしたことがあることを素直に認める。

国語の授業で考えてみる。小学2年生の教材に「たんぽぽのちえ」という説明文がある。子どもたちの関心は、身近な植物であるタンポポのもつ不思議な知恵に向かうはずである。だからといって、タンポポに詳しくなること自体が国語科の内容ではない。はじめ、なか、おわりの三部から成る説明文の基本構造の理解、やがて、そのあと、このころになるとなど、時間の経過や順序を表す言葉への着眼などが指導内容となる。

むずかしいのは、教材文を読み深めながら、それだけに終わらずに、他の説明文の読解にも活用できるような汎用性のある着眼や理解にまで高めることである。

ところが、教科書に書かれてあることの意味を内容と誤認し、一生懸命にタンポポの三つの知恵を理解させようとしている授業を見ることがある。きっと、授業者は、子どもの関心から、そのような授業展開にしたと言うだろう。子どもたちは、タンポポの知恵に興味津々であっても、それを解き明かすことを通して、単元の学習が終了する頃には、説明文の読解力も高まっているような活動を組織しなければならない。それが、授業づくりである。国語科の場合、活動と内容の結び付きにおいて任意性が高く、いわゆる作品主義や活動主義に陥りやすい。

中学校の教科書教材に、環境問題に関するものがあるとすると、教材文の読解は、そっちのけで、環境問題の調べ学習が始まり、まとめの作業があり、最後は発表会となる。生徒は、十分に活動はしている。調べる、書く、話す力は向上するかもしれない。何より、環境問題への意識が高まるだろう。だが、説明的文章を読み解く力はついたのだろうか。教科書の教材文は、調べ学習に向かうきっかけにすぎない。このような授業が存在する。

授業では、少なくとも、なぜこの活動に取り組むのか、子どもがその意味を実感できることが求められる。大事なことは、それが子どもにとって意味のある活動であるかどうかである。ただ楽しければいいというわけではない。そこに、教育的な価値がなければならない。この教育的価値を内容と呼んでいる。

授業を何時間もやってきたという経験だけでは、内容はクリアできない。教材を研究する意欲、技能、時間が必要である。内容が伴わないと、授業が終わったときに、いろいろと活動はしたが、結局、何を学んだのか、何がわかったのかが判然としなくなる。このような授業をなくしたい。授業を考えるときに、授業者が、活動と内容をはっきりと区別して考える必要がある。授業者に任されている部分が多いというのは、授業をつくる側からするとおもしろい。だが、その一方で、恐ろしくもある。そのことを理解した上で、授業づくりを考えていかなければならない。